

国

語

●満点100点 ●時間50分

- 一 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。
- 友人の助言を謙虚に聴く。
- (2) 冬の夜空に満天の星が輝く。
- (3) 入学の記念にクラス写真を撮影する。
- (4) 高原の静かな湖畔でひと夏を過ごす。
- (5) 青々とした麦の穂がまっすぐに伸びる。

- 二 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。
- (1) 白鳥の飛来が冬の訪れをツげる。
- (2) 桜のジュヒを使って絹糸を染める。
- (3) モえるような夕日が校舎を赤く照らす。
- (4) 世界一周のコウカイを終えた客船が母港に戻る。
- (5) 観客席から選手のゼンセンをたたえる拍手がわき起こる。

- 三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついてい
る言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

中学二年生の「ぼく(笹森ヒカル)」は、転校初日の自己紹介で趣味のギターの話をした。翌日、学級委員の中島紗英から誘われて、紗英の幼なじみである同級生の杉田の家で一緒にギターの練習をすることになった。

放課後、三人で、杉田の家に向かった。

中学校は都心の便利な地域にあった。周囲にはテレビ局や、レコードスタジオや、深夜に人の集まる繁華街があった。けれども、大

通りから一步はずれると、古い静かな町並みが残っていた。狭い路地があり、老人たちが暮らしていた。

杉田の父は、開業医だった。古ぼけたコンクリートの建物があった。それが診療所で、祖父の代から、そこで開業しているという話だった。住居は診療所に隣接した木造の建物で、こちらはかなり古びたものだった。

杉田の母が出迎えてくれた。

「あら、今日は新しいお友だちね。」

明るくて、上品な女性だった。表情と話し方から、母と子の親密な関係が見てとれた。

「転校生だ。ギターがうまいらしい。ちよつと合わせてみる。」

「勉強もちゃんとやってね。」

笑いながら母が言った。穏やかな言い方だが、その奥に厳しさが感じられた。息子の将来に親は大きな期待を寄せているのだ。

(1) ＊サイモン&ガーファンクルをやるんだ。英語の勉強だよ。」

杉田はぼくを応接間に案内した。壁際にアップライトのピアノがあり、大きな本棚に、文学全集などと並んで、大量の楽譜がつまっていた。豪華なオーディオ装置のわりに、ギターが四つ並んでいる。どれもプラグなどのないアコースティックギターだ。ネックの幅が狭くスチール弦を張ったフォークギターもあった。

「どれでも好きなものを使っていいよ。」

杉田が言った。ぼくは使い慣れたふつうのガットギターを手にとった。杉田は本棚から楽譜を取り出して、譜面台にセットした。

「これをやろう。」

開かれたページは、「旧友」(オールド・フレンド)だった。名曲だ。ぼくの好きな曲だった。旋律とコードネームが記されただけの楽譜だったが、CDを聴いて憶えたのか、杉田は流れるように*イントロを弾き始めた。

ギターが響き始めた瞬間、自分よりも技量が上だと感じた。少しくやしかった。ぼくはコードで伴奏をした。

旧友が公園のベンチに座っている。まるで*ブクエンドのように……。

杉田が歌い始めた。ぼくも控えめに声を合わせた。

かつて親友だった老人が二人、紙くずが風に舞う、世の中から忘れ去られた公園に、ブクエンドのように並んで座っている。いつかぼくたちもそんなふうになるんだろうか。七十歳になるって、どういうことだろう……。そんな思いが静かに語られる。悲しい歌だ。(2) ぼくたちは知り合ったばかりなのに、たちまち数十年を親友として過ごした老人になって、遠い過去を振り返っている。

この曲を一人で演奏していた時には、その静かでもの悲しい旋律に惹かれただけだった。ぼくには年老いるまでずっとつきあっているような友だちはいなかった。でもいまは、この曲を声を合わせて歌っている。杉田とは会ったばかりだ。まるで運命的な出会いのように、こうして年老いた旧友の歌を歌っている……。

演奏が終わった。しばらくは静けさが続いた。

急に、拍手の音が響いた。かたわらで見守っていた紗英が、声をあげた。

「すてき。二人の声がびったりハモってたわ。」

ラジオで曲を聴いたことはあるが、CDをもっていないので、くりかえし聴いたわけではない。それでも即興で、ぼくは途中から、楽譜より三度ほど高い音程で、ハーモニーをつけていた。

杉田が言った。

「いい声してるな。」

(3) 不思議な気がした。自分が声を出して歌っている。それはぼくにとって初めての体験だった。ギターでコードを弾きながら、祖父に聞こえないように、小声で歌うことはあったが、人前で声を出し

て歌ったことはなかった。生まれて初めて、歌うということの喜びを、ぼくはかみしめていた。

杉田が楽譜のページをめくった。明日に架ける橋……。

杉田がイントロを弾き始めた。ぼくはコードだけを押さえる。そのまま杉田がリードギターを弾き続けたので、歌はぼくがソロで歌うことになった。英語の発音には自信がなかったが、好きな曲だったので、せいっぱい歌った。

杉田のギターは正確で、心地よかった。自分の声が、ギターの音と融け合っていく。誰かの伴奏で自分が歌うことがあるとは、想像したこともなかった。

英語は得意ではないが、およその意味はわかる。

(4) きみが疲れ切って、自分がちっぽけなものに思えた時、ぼくがそばにいて、きみの涙をかわかしてあげよう……。そんな歌詞が、胸の中にしみこんでくる。

これは恋の歌なのだろう。そうかもしれないが、歌っているうちに、男同士の友情の歌のように感じられた。

(三田誠広「永遠の放課後」による)

〔注〕 サイモン&ガーファンクル——アメリカの二人組の歌手。

イントロ——曲などの導入部分。

ブクエンド——立てた書物が倒れないように、両端などに置いて支えるもの。本立て。

〔問1〕 (1) * サイモン&ガーファンクルをやるんだ。英語の勉強

だよ。」とあるが、この表現から読み取れる杉田の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア ギターの練習はしたいものの、自分に期待している「母」の言葉に従ってすなおに勉強に取り組もうとしている様子。

イ 自宅に招いた同級生の前で「母」に勉強もするようにと言われ、もっともらしい言い訳をして受け流そうとしている様子。

ウ 勉強もするようという「母」の言葉に反発し、友人と一緒にギターの練習をするのだという強い意志を示している様子。

エ せっかく親しい友人たちを連れてきたのに、「母」から勉強をするように厳しく注意され、いきどおっている様子。

〔問2〕 (2) ぼくたちは知り合ったばかりなのに、たちまち数十年を親友として過ごした老人になって、遠い過去を振り返っている。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 長年の親友だった老人たちの様子と出会ったばかりの「ぼく」や杉田の様子を、それぞれの心情に着目して対照的に表現している。

イ 年離れた旧友の悲しい歌を歌う「ぼく」と杉田の気持ちがいかに歌の中に入り込んでいく様子を、幻想的に表現している。出会ったばかりの杉田と親友になることを予期するようになっていく「ぼく」の様子を、順序立てて説明的に表現している。

エ 「ぼく」が杉田と歌っているうちに長年の親友のようになれたと感じている様子を、歌詞に重ね合わせて印象的に表現している。

〔問3〕 (3) 不思議な気がした。とあるが、「ぼく」が「不思議な気がした」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア これまでまったく練習などしていないのに、初めて一緒に歌った友人に歌の技巧をほめられたから。

イ ラジオで聴いたことがあるだけの曲なのに、即興でハーモニーをつけて全曲を歌うことができたから。

ウ 人前で声を出して歌っているということを実感したのが、生まれて初めてであることに気付いたから。

エ 友人の家を訪問して楽しく歌っている最中に、この場にはいない祖父のことを突然思い出したから。

〔問4〕 (4) きみが疲れ切って、自分がちっぽけなものに思えた時、

ぼくがそばにいて、きみの涙をかかわかしてあげよう……。そんな歌詞が、胸の中にしみこんでくる。とあるが、このときの「ぼく」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 自分の声と融け合う心地よい伴奏で歌っているうちに、歌詞の内容が杉田との友情のように感じられ、共感を覚えている。

イ 歌詞の内容には深く感銘しながらも、誰かに伴奏してもらいながら歌っている状況にかすかなとまどいを覚えている。

ウ かつて小さな声で歌い続けていた大好きな曲をギターの伴奏で久しぶりに歌ってみて、なつかしさを覚えている。

エ 何曲も伴奏してもらって歌っていることで、ギターのうまい杉田と親友になれたことを確信し、誇らしさを覚えている。

〔問5〕 この文章の中で「ぼく」は、「友」とはどのような存在であるべきだと感じているか。五十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔四〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

多くの人は、科学は正しい事実だけを積み上げてできていると思うかもしれないが、それは真実ではない。実際の科学は、事実の足りないところを「科学的仮説」で補いながら作り上げた構造物である。科学が未熟なために、本来必要となるべき鉄骨が欠けているかもしれないのだ。新しい発見による革命的な一揺れが来たら、いつ倒壊してもおかしくない位である。（第一段）

(1) だから、「科学が何であるか」を知るには、逆に「何が科学でないか」を理解することも大切だ。科学は確かに合理的だから、理屈に合わない迷信は科学ではない。それでは、占いや心霊現象についてはどうだろうか。占いは、当たらないことがあるから非科学的な

のではない。天気予報は、いつも正確に予測できるとは限らないが、科学的な方法に基づいている。また、お化けや空飛ぶ円盤の存在は、科学的に証明されてはいないわけだが、逆に「お化けが存在しない」ということを証明するのも難しい。なぜなら、いつどこに現れるかも分からないお化けを徹底的に探すことはできないわけで、結局見つからなかったとしても、「お化けが存在しない」と結論するわけにはいかない。ひよつとして今この瞬間に自分の目の前にお化けが現れるかもしれないからだ。(第二段)

哲学者のK・R・ポパーは、科学と非科学を分けるために、次のような方法を提案した。反証(間違っていることを証明すること)が可能な理論は科学的であり、反証が不可能な説は非科学的だと考える。検証ができるかどうかは問わない。(第三段)

そもそも、ある理論を裏付ける事実があったとしても、たまたまそのような都合の良い事例があっただけかもしれないので、その理論を「証明」したことはならない。しかも、ある法則が成り立つ条件を調べるといっても、すべての条件をテストすることは難しい。むしろ、科学の進歩によって間違っている修正を受けうるものの方が、はるかに「科学的」であると言える。(第四段)

一方、非科学的な説は、検証も反証もできないので、それを受け入れるためには、無条件に信じるしかない。科学と非科学の境を決めるこの基準は、「反証可能性」と呼ばれている。(2)反証できるかどうか科学的な根拠となるというのは、逆説めいていて面白い。

(第五段)

例えば、「すべてのカラスは黒い」という説は、一羽でも白いカラスを見つければ反証されるので、科学的である。しかし、「お化けが存在することは検証も反証もできないので、その存在を信じることが非科学的である。逆に、「お化けなど存在しない」と主張することは、どこかでお化けが見つければ反証されるので、より科

学的だということになる。一方、「分子など存在しない」という説は、一つの分子を計測装置でとらえることですでに反証されており、分子が存在することは科学的な事実である。(第六段)

科学の知識は、経験による根拠を必要としない*。数学の公理のような「アポストリオリな知識」と、経験を根拠として反証できる「アポストテリオリな知識」とに、大きく分けられる。(第七段)

(3)ここで、反証できるアポストテリオリな知識しか科学的と認めないならば、ちよつと極端である。これでは、簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが「科学的」ということになってしまい、果たして科学は進歩するのか、という疑問が生ずる。(第八段)

科学理論の発展という観点から、アメリカの科学史家のT・S・クーンは、ある一定の期間を代表して手本となるような科学理論(例えば天動説)を「パラダイム(範例)」と名付けて、新しいパラダイム(例えば地動説)へと世界観が変革しながら科学が進歩するということを、豊富な例をもとに主張した。(第九段)

このように、科学的仮説は検証と反証を繰り返しながら発展していく。科学における仮説の役割がとても大きいことは、数学者・物理学者のH・ポアンカレがはつきりと述べているところでもある。

(第十段)

しかし、科学者が述べる説が、いつも仮説の形を取っているとは限らない。科学者の単なる思いつきや予想はあくまで意見に過ぎず、科学的な仮説とは違う。科学者は仮説と意見をきちんと分けて述べる必要があるが、一般の人にはその区別がよく分からないので、両者を混同することで誤解が生じやすい。(第十一段)

科学的な仮説に対しては、それが正しいかどうかをまず疑ってみることが、科学的な思考の第一歩である。仮説を鵜呑みにしたのでは、科学は始まらない。(第十二段)

* 寺田寅彦は、「物理学は他の科学と同様に知の学であつて同時

に又疑の学である。疑うが故に知り、知るが故に疑う。(中略)疑は知の基である。能く疑う者は能く知る人である」と述べている。さらに「恐るべきは権威でなくて無批判な群衆の雷同心理でなければならぬ」とも言う。(第十三段)

ラテン語の「コギト・エルゴ・スム」(われ思う、ゆえにわれあり)という* R・デカルトの言葉は、「われ疑う、ゆえにわれあり」と訳す方が実際の意味に近い。これは、疑っている「私」の存在を疑うことはできない、ということなのである。(第十四段)

ただし、自分の意見を「われ思う、ゆえに真なり」のように見なすようになったら、もはや科学者としては終わりである。科学にとって実証性こそが命であり、これを失うことは科学を放棄するのに等しい。危険なのは、一般の人々に向けて自分の考えを述べているうちに、仮説と意見の境についての感覚が麻痺してしまうことである。そのため、科学者が書いたエッセーの中にもずいぶん無責任な意見があるのだ。(第十五段)

一般向けの科学についての本を手にとったら、どの程度科学的な良心に従って書かれているかを見抜く眼力が必要である。科学的な厳密さに対する感覚は、どのような証拠があるのか、どうして別の説ではいけないのか、と仮説と意見を見分けるべく批判的に考えることよってのみ磨かれる。科学が分かるには、そのような思考の積み重ねが大切なのだ。(第十六段)

(酒井邦嘉「科学者という仕事」による)

〔注〕

数学の公理——数学の理論の基礎となる、証明がいらぬ事柄
寺田寅彦——物理学者、随筆家、俳人。

R・デカルト——フランスの哲学者、数学者。

〔問1〕

(1) だから、「科学が何であるか」を知るには、逆に「何が科学でないか」を理解することも大切だ」とあるが、「何が科学でないか」を理解することも大切だ」とはどういうことか。次の

うちから最も適切なものを選び。

ア 科学は事実のみを積み上げることで成立しているもので、事実が正しいのか誤りなのかを厳密に区別することが重要だということ。

イ 時として新しい発見で事実が否定されてしまう科学について考えるためには、常に事実を疑ってみることが重要だということ。

ウ 科学はすべて実際には見えない「科学的仮説」の組み合わせで成り立っているので、仮説の検証が何よりも重要だということ。

エ 事実のみで構築されてはいない科学というものを理解するためには、むしろ科学的でないものを見分ける力が重要だということ。

〔問2〕

(2) 反証できるかどうか科学的な根拠となるというのは、逆説めいていて面白い。とあるが、筆者が「逆説めいていて面白い」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 理論が科学的であることを示すには、検証によるのではなく無条件に信じられるかどうかによって判断する方法が最適だと思っただから。

イ 科学と非科学の境を決めるのに、すべての条件は調べずにいくつかの事例を示す方法を用いていることが好ましく感じられたから。

ウ 理論が科学的かどうかを判断するのに、正しさを示す事実の有無ではなく誤りを示す方法の有無によっていることが興味深かったから。

エ 科学的な理論の誤りを見分けるには、ある法則が成り立つすべての条件を満たすことにより証明する方法が単純明快だったから。

〔問3〕

(3) ここで、反証できるアポステリオリな知識しか科学的と認めないならば、ちよつと極端である。とあるが、筆者が「反証できるアポステリオリな知識しか科学的と認めないならば、ちよつと極端である」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 経験による根拠を必要としない知識だけを用いた理論は科学的とはいえないので、科学の発展に必要ではないと考えたから
イ 経験を根拠として反証が可能な知識だけを用いた理論を科学的とするのでは、科学の発展が望めなくなる場合があると考えたから。
ウ あらゆる科学の知識を経験による根拠があるかどうかで分けると、偏った理論に基づく科学しか進歩しないのではないかと考えたから。

エ 物事の前提となる自明の知識に基づく理論は、経験による根拠を必要としないので、科学の進歩を止めてしまうと考えたから。

〔問4〕 この文章の構成における第十一段と第十二段との関係を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第十一段で示した新たな論点について、第十二段ではその根拠を明らかにして論の妥当性を主張している。

イ 第十一段で示した課題について、第十二段では課題解決の基本的な考え方を改めて述べて結論へと導いている。

ウ 第十一段でまとめた内容について、第十二段では新たな観点に基づく考え方を示して論の展開を図っている。

エ 第十一段で補足して示した考え方について、第十二段ではその具体的事例を挙げて論を分かりやすくしている。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「科学が分かる」というテーマで各自が具体的な体験を示して意見を発表することとす

る。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や「なども、それぞれ字数に数えよ。

〔五〕

次のAは「*玲瓏山に登る」(*蘇軾作)という漢詩とその口語訳であり、Bはその漢詩に関する対談である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。(*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

A

何年 僵立す 両蒼龍
瘦脊盤盤として尚お空に倚る
翠浪 舞い翻る 紅の*罷亞
白雲 穿ち破る 碧き玲瓏
*三休亭上 工みに月を延き
九折巖前 巧みに風を貯う
脚力尽くる時 山更に好し
有限を將て*無窮を趁うこと莫かれ
莫下將_二有限_一趁_二無窮_上

(口語訳)

玲瓏山の、二匹の青龍にも似た、あの二つの高い峰は、一体何年もの間、あのように直立不動で聳えてきたのだろうか。近づくと、老人の瘦せた背骨のように曲がりくねって、それでもなお、空に寄りかかるように立っている。そこを登ってゆくと、紅く色づいた広い稲田を背景にして、青葉が波のように風に翻り、青い玲瓏山の両峰が、白雲を突き破って聳え立っている。山頂近くには曲がりくねった九折巖が続き、その近くには、月を眺め風をたくわえるにちようどよい三休亭が設けられている。歩き疲れて、足を運ぶ力も尽きようとする時、高山の景色はひととき美しく見える。しかし、自分はいけません、限りある人間の身、これ以上、無窮の美を追い求めることはしないでおこう。

B

串田 蘇軾の「脚力尽くる時 山更に好し。」という句は「人生

の秋」を感じさせる名文句だと思いませんか？

諸田 私は若いつもりですから、まだ脚力は尽きていませんが（笑）、それでも味わいのある、いい言葉だなあと思います。

串田 (1) 光陰矢の如し、あつという間ですよ（笑）。

諸田 いや、私は歩いて通勤していますから、大丈夫（笑）。

串田 あなたはともかく、蘇軾は健脚だったらしいですね。

諸田 「玲瓏山に登る」は三十八歳の時の作品ですが、四十七歳の時に書いた有名な「後赤壁の賦」を読むと、高い断崖をいとも簡単に登ったようですね。

串田 彼があんまり元気なので、付き添っていた友人はついて行けなかったみたいですね。

諸田 その蘇軾が「脚力が尽きた。」というんですから、相当険しい山だったんでしょう。でも、この詩の魅力は、だからもうダメだといっていない点ですね。「山更に好し。」とプラスの要素を見つけている、その積極性だと思います。

串田 私も蘇軾は実に健全な精神の持ち主だと思います。蘇軾という人は元来、プラス思考なんです。

諸田 山の頂上近くまで登ったところで息が切れ、ひと休みしてふと周りを見た時に、山の情景がひととき美しく見えたと……。

串田 蘇軾は、もうそれで十分だ、そう納得するんですね。これ以上の美を求めるなら人間界にはおれないと……。

諸田 (2) 「有限を將て無窮を趁うこと莫かれ。」ですね。

串田 (3) 誰しもこの世でできることには限界があるわけですが、だからといって悲観的になることはないんです。体力でもそうですが……。

諸田 確かに二十代のころとは違いますね。若い時は体力にま

かせて一気に登りますから、途中の風景なんて目に入らない。

串田 ところが、体力がなくなると時々立ち止まらないといけない。すると以前は見えなかった景色が見えてくるんです。

諸田 非常に象徴的な一句ですね……。確かに年を重ねるということは、肉体的には衰えることを意味しますが、若いころにはできなかった物の見方ができるということでもある。

串田 体力も視力も記憶力も、年とともに衰えます。これは仕方ないんです。

諸田 それを受け入れようとしなくていいのは、かえって醜い。*徳富蘇峰もこの詩の最後の二句を引用して、これこそが「安心立命の法」だと言っているんです。

串田 限りあることを知り、限りあることに満足せよ、ということですね。*老子のいう「知足」の考えにも通じます。*明哲保身の術ともいえる……。

諸田 ただ難しいのは、「有限」と「無窮」との線をどこで引くかですね。「足るを知る」にしても、どこで満足するか、それが難しい……。

串田 私は二つの点が大切だと思います。「人生の秋」だからこそ収穫できる素晴らしいものに食欲であること、それと、秋なのに春を求めないこと（笑）。

諸田 そう言われちゃうと、なんだか簡単なことに思えますね（笑）。

串田 さて、「脚力尽くる時 山更に好し。」「これを「人生残り少なくなつてその良さがわかる」と解釈する場合もあるんですが、私は「立ち止まって考えることで、以前は見えなかったものが見えてくる。」、そう理解しています。

諸田 まあ、今の世の中、立ち止まったら転んでしまうという
ような、ある種の強迫観念に取り憑かれていている気もします
ね。

串田 世の中がこれだけスピードを求めると、自分で意識的に
立ち止まるしかないんじゃないですか？

諸田 まるで動く歩道に乗っているようなもので、止まれない
んですね。しかし、止まらないと見えないものがある……。

串田 私はね、近ごろとみに「立ち止まって考える」ことの大切
さを痛感しています。だからこのところずっと「立ち止
まって考える」、スローシンキングを*コンセプトにあれ
これ発信しているんです。

諸田 一心不乱や一所懸命は良いことですが、独断と偏見に陥
りやすいという落とし穴がありますしね。

串田 頑張ることは良いことなんですが、下手をすると頑かたく
なってしまう。

諸田 他人の言に耳を傾けない「*ポリシーのある人」もいて
困こるんです(笑)。

(4) 串田 孔子は、「口にしたことは何があっても実行し、やり始め
たことをあくまで成し遂げようとするのは大した人物では
ない。」と言いうんですね。

諸田 常識とは逆な気もしますが、面白いですね。そういう人
間は精神的余裕がないというか、融通きの利かない「小人しょうじん」
なんですね。

串田 その通り(笑)。柔軟に生きることで人生を楽しむことが
できるし、豊かな人生経験をもつ人は、慎重で穏やかであ
るはずだということです。

諸田 そういう意味では、漢詩は、立ち止まって考える、よい
機会を与えてくれますね。しかも、論理だけでなく、感情

も豊かにしてくれますから……。

串田 中国人にとって詩は宗教的な意義があるともいわれるで
しょ？ それは人々の心を癒いやし精神を浄化するからで、こ
の世の生きとし生けるものを愛あいし憐あはれむ気持ちをはぐくん
でくれるんじゃないでしょうか。

諸田 いつも電車や車に乗っている「立ち止まる」こともで
きませんが、たまには歩いてみるといいですね。立ち止ま
って路傍の石や花や木を愛めでてみれば、心豊かに生きると
いう意味を実感できますし……。

串田 (5) それが自分の生きる力にもなる。

(注) 玲瓏山——中国浙江省杭州市近くの山。玲瓏に同じ。
蘇軾——中国宋代の政治家、詩人、書家。

罷ひ亞——多くの稲。

三休亭、九折巖——ともに玲瓏山にある名所。

無窮——無限。

徳富蘇峰——評論家、歴史家。

老子——中国春秋時代の思想家。

明哲保身——聡明な判断によって、身の安全を保つこと。

コンセプト——統一的な視点や考え方。

ポリシー——方針。

[問1] (1) 光陰矢の如し、あつという間ですよ(笑)。とあるが、

「光陰矢の如し、あつという間ですよ」の内容を説明したものと
して最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 物事は好機を逃さないように、すばやく実行したいものであ
る。

イ 年をとつたら、病気をしないでずっと健康でいたいものであ
る。

ウ 月日はとても早く過ぎていくので、年をとるのも早いものである。

エ 事を急ぐと失敗しがちなので、じっくり取り組みたいものである。

〔問2〕 (2)「有限を將て無窮を尠うこと莫かれ。」ですね。とあるが、蘇軾が「有限」を感じたときに周囲の情景がどのように映っていたかを述べた箇所がある。その箇所をAの口語訳からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕 (3)誰しも とあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア できる イ ある

ウ なる エ ないんです

〔問4〕 (4)串田 の発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 孔子の言葉を示すことで漢詩のもつ良さについての話題を引き出し、対談の内容に厚みをもたせている。

イ 常識とは違う孔子の言葉を示すことで、常識にとらわれてしまふことの弊害という別の問題を提起している。

ウ 孔子の言葉を示すことで自分の主張の根拠とし、他人の意向を重んじる考え方に反論を展開している。

エ 思想家である孔子の言葉を示すことで、漢詩についてのやりとりを終わらせて哲学の話題へ変化させている。

〔問5〕 (5)それが自分の生きる力にもなる。とあるが、串田さんがこのように述べたわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 公言したことは実行せよという先人の言葉に従い、人々の信頼を得ることが心豊かな人生を送るために重要なことだと考えたから。

イ 他人の言葉をそのとおりに受け入れるのではなく、自分の考えを貫くことが心豊かな人生を送るために不可欠なことだと考えたから。

ウ スピードはそれ程速くなくても、一直線に目標に向かって行動し続けることが心豊かな人生を送るために必要なことだと考えたから。

エ ひたすら頑張るだけではなく、時には周りにも目を向ける余裕をもつことが心豊かな人生を送るために大切なことだと考えたから。

(注) この解答用紙は編集上の都合により、
依153実物を約65%に縮小してあります。
使用する拡大コピーによりほぼ原寸大で
真がまます。

1	(1) 謙 虚	(2) 輝 く	(3) 撮 影	(4) 湖 畔	(5) 伸 び る
---	---------	---------	---------	---------	-----------

2	(1) ツ げ る	(2) シ ュ ヒ	(3) モ え る	(4) コ ウ カ イ	(5) セ ン セ ン
---	-----------	-----------	-----------	-------------	-------------

3	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

4	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

5	(問1)	(問2)		
	(問3)	(問4)	(問5)	

1 (計10点)					2 (計10点)					3 (計25点)					4 (計30点)					5 (計25点)				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点	5点	5点	5点	5点	5点

国語

解答

- 一 (1) けんきょ (2) かがや
(3) さつえい (4) こはん (5) の
- 二 (1) 告 (2) 樹皮 (3) 燃 (4) 航海
(5) 善戦
- 三 〔問1〕 イ 〔問2〕 エ
〔問3〕 ウ 〔問4〕 ア
〔問5〕 (例) 苦しくつらい場面でも互いに助け合い、過ごしてきた時間や生き方をともに振り返ることのできるような存在。(50字)
- 四 〔問1〕 エ 〔問2〕 ウ
〔問3〕 イ 〔問4〕 イ
〔問5〕 (省略)
- 五 〔問1〕 ウ
〔問2〕 高山の景色はひととき美しく見える
〔問3〕 イ 〔問4〕 ア
〔問5〕 エ

一 〔漢字〕

(1) ひかえめで素直なこと。 (2) 音読みは「光輝」などの「キ」。 (3) 写真や映画にとること。 (4) 湖のほとり。 (5) 音読みは「伸縮」などの「シン」。

二 〔漢字〕

(1) 音読みは「告白」などの「コク」。 (2) 樹木の幹や根の、最も外の部分にある組織。木の皮のこと。 (3) 音読みは「燃焼」などの「ネン」。 (4) 船で海上を航行すること。 (5) 実力を出し尽くしてよく戦うこと。

三 〔小説の読解〕 出典：三田誠広『永遠の放課後』。

〔問1〕<文章内容>母親が「勉強もちゃんとやってね」と言ったので、杉田は「サイモン&ガーファンクル」の名を挙げて、「ギターの実習」を「英語の勉強」だと言いつくろったのである。
〔問2〕<表現>「旧友」という曲を歌っているうちに、二人の老人の姿が、「ぼく」と杉田の姿に重なり、「ぼく」と杉田とが、ずっと前からの「親友」だったような気がしてきた。
〔問3〕<心情>杉田に「いい声をしてるな」と言われて、「ぼく」は、「自分が声を出して歌っている」ことに気づかされた。「人前で声を出して歌う」ことは、「ぼく」にとって「初めて

の体験」である。

〔問4〕<心情>「ぼく」は、杉田のギターを心地よく感じ、「自分の声が、ギターとの音と融け合っていく」のを感じたので、「きみ」と「ぼく」の「恋の歌」が、杉田と「ぼく」の「友情の歌」のように感じられたのである。

〔問5〕<文章内容>「旧友」という歌では、長い年月を親友として過ごした二人の老人が、公園のベンチに座って「遠い過去」を振り返っている。「明日に架ける橋」では、相手が疲れ切って苦しんでいるとき、そばにいて助けてあげたい気持ちを歌っている。「ぼく」は、この二つの曲に歌われた内容に共感し、そこから得た「友情」のイメージを、杉田と自分の上に重ねて見ている。

四 〔論説文の読解—自然科学的分野—科学〕 出典：酒井邦嘉『科学者という仕事』。

<本文の概要>科学は「科学的仮説」で補ってつくられた構造物であるから、新しい発見があれば修正される。科学を理解するには、科学でないものを見分けることが大切である。科学と非科学は、「反証」できるかどうかで分けられる。科学的なものは反証が可能だが、非科学的なものは検証も反証もできない。科学の知識には、経験による根拠を必要としないものと、経験を根拠として反証できるものがある。後者ばかりでは科学は進歩しないが、科学理論の発展には、仮説の検証と反証の繰り返しが必要である。科学的仮説は、意見とは異なる。科学的な仮説が正しいかどうかを疑うことが、科学的な思考の第一歩である。

〔問1〕<文章内容>科学は「正しい事実だけを積み上げてできている」のではなく、事実の「足りないところ」を「科学的仮説」で補った構造物である。ゆるぎないものではないので、科学を理解するには、科学的でないものを見分けることが有効なのである。

〔問2〕<文章内容>「逆説」とは、真理に反しているように見えて、実は真理である説のこと。「反証」は「間違っていることを証明する」方法。「反証が可能なのは科学的」という考えは、一見矛盾しているように見えるが、実は「事実」によって根拠づけられた理論より「はるかに『科学的』」なのである。

〔問3〕<文章内容>「経験」を根拠としていて「反証」できる「アポステリオリな知識」は、科学にとって重要である。しかし、それだけでは、

科学を構成するすべての要素が「簡単に証明したり取り下げられたりする」ものになってしまう、不安定である。それでは手本となるような「パラダイム」も生まれず、「科学は進歩」しなくなる。

〔問4〕〈段落関係〉第十一段落では、前段落の「仮説の役割」を受けて、「仮説」と「意見」を区別することの必要性を説いている。第十二段落では、「仮説」を疑ってみることが「科学的な思考の第一歩である」と述べている。

〔問5〕〈作文〉「科学が分かる」とは、科学と科学でないものを見分けることができる、ということである。そのためには仮説を疑い、物事を批判的に考える「思考」の積み重ねが大切である。

五〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典：串田久治，諸田龍美『漢詩の知恵』。

〔問1〕〈文章内容〉「光陰矢の如し」は、月日の早く過ぎゆくことをたとえた言葉。「若いつもり」でいても、「あつという間」に年を取って、「脚力」も衰えてしまうのである。

〔問2〕〈漢詩の内容理解〉高い峰を登ってきて、「脚力」が限界に達したとき、蘇軾の目に「高山の景色」が「ひととき美しく見え」た。蘇軾はその美しさに満足し、「限りある人間の身」で、それ以上の「無窮の美」を追い求めることはしないでおこう、と思ったのである。

〔問3〕〈文の組み立て〉人間には「誰」しも「限界がある」のである。

〔問4〕〈文章内容〉串田さんが孔子の言葉を引用したことで、「頑かたくな」な生き方から「柔軟」な生き方へと話題が展開した。さらに「漢詩」が「立ち止まって考える」機会を与えてくれることや、「詩」が「心を癒いやし」てくれることなど、漢詩の意義について語り合い、「心豊かに生きる」ことの大切さを再確認している。

〔問5〕〈文章内容〉串田さんは、蘇軾の詩が「立ち止まって考える」ことの大切さを表していると考える。一心不乱に頑張るだけでなく、時には立ち止まって、「路傍の石や花」を愛あでてみるのが、「心豊かに生きる」ことにつながるのである。